

説教 『昇天とキリストの証人』 山本 護牧師  
 聖書 詩編 16:7~11 / 使徒言行録 1:6~11

今年の昇天日は5月5日。復活後40日間、キリストは弟子を教え、食事を共にし、甦りの確かさを示した(使徒 1:3~4)。御国の完成(終りの日)を待ち焦がれてじれなくなった使徒が、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか(1:6)」と尋ねた。イエスは「父が御自分の権威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない(1:7)」と応じ、今果たすべき使命を伝えた(1:8)。終りの日は誰にも分からない。また救われる範囲も、信仰者である「イスラエル」に限定されず、予測不能な「地の果て(1:8)」にまで広げられている。御心や救いの条件を図式的に語る者、知りたがる者がいるが、それは弟子の期待(1:6)であって、イエスの教え(1:7)ではない。

復活後、生前のように弟子たちと共にいたイエスだが、このやりとりの後、天に上げられる(1:9~10)。原典に注目すべきことがあった。短い節の中で(1:10~11)、「eis ton ouranon=天に入った(直訳)」という言葉が呪文のように4回もくり返されている。イエスがキリストとして天に在ることの強調だろう。イエスが昇天し、天に入ったことをくり返し語ることで、何を伝えようとしているのか。

「主イエスは、弟子たちに話した後、天に上げられ、神の右の座に着かれた(マルコ 16:19)」。「神の右の座」に在るとは、遠方で神々しく輝いていることでは決してない。宣教する弟子に対して「主は彼らと共に働き、彼らの語る言葉が真実であることを、それに伴うしるしによってはっきりお示しになった(16:20)」。キリストが天に在るとは、すなわち、いかなる時も、どんな場にも、共におられ、共に働かれ、しるしを為されること。遠く離れたのではなく、むしろいっそう身近におられるのだ。

天の右の座におられるとは、父なる神が創り、神が続べ給う宇宙のすべてが、キリストの場となり、時となったということ。復活から(使徒 1:3)昇天を経て(1:9)、世の隅々はキリストのものとなった。それでは実際、キリストはどのような者と共に働かれるのか。「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして~地の果てに至るまでわたしの証人となる(1:8)。聖霊を受け、一人の証人として生きる私たちが、永遠なるキリストを経験する。この言葉は命令であるより、約束であろう。

「命に通じる門はなんと狭く、その道も細いことか。それを見いだす者は少ない(マタイ 7:14)」。キリストの証人として生きる時、この事実を実感させられる。地の果てにおいて私たちは、どのような証人となるのか、うまい処方箋などない。成果や効率からも縁遠い。だが神の右の座に着かれたキリストは(マルコ 16:19)、共に働き、真実を示し、しるしを与える(16:20)。八ヶ岳伝道所においては、この約束は明白ではないか。これまでも、これからも、一人ひとりが証人として押し出されていくだろう。

「わたしは絶えず主に相対しています。主は右にいまし、わたしは揺らぐことはありません(詩編 16:8)」。「右」とは近さや親しさ、あるいは権威。主(キリスト)の近さは「心の喜び、魂の躍動、からだの安心(16:9)」。死を超克し(16:10)、満ち足り、喜び祝い、「右の御手から永遠の喜びをいただく(16:11)」。キリストは「天に上げられ、神の右の座に着かれ(マルコ 16:19)」、私たちはその命と聖霊に満たされる。



【おまけのひとこと】

キリストにとって 距離は障壁ではない 時は制約ではない 救いは広められても希釈されえない  
 ところが人間には 障壁があり 制約があり 希釈化がある 信仰の希釈化はとりわけおぞましい